

## 第378回放送番組審議会

1 日 時 2017年9月19日(火)14時～15時30分

2 場 所 tvk 第1会議室

3 委員総数 8名 出席者8名

出席委員; 山田一廣委員長、布施勉副委員長、白石俊雄委員、林義亮委員、伊藤有壱委員、  
五大路子委員、吉川知恵子委員、二宮泉委員  
tvk; 中村行宏社長、押川渉取締役、嶋田充郎報道局長、遠藤幹彦報道部長、  
近藤和之編成部長

### 4 議 題 (1)放送番組

資料:①9月のタイムテーブル

②9月～10月の特番一覧表

### (2)視聴合評

報道特別番組『「見えない壁」～津久井やまゆり園事件から 1  
年』

2017年8月12日(土)午後4時～4時55分

### (3)その他 報告事項

・視聴者対応

報告期間:2017年7月15日(土)～2017年9月15日(金)

・第377回(7月)放送番組審議会の議事報告

(「猫ひたプラス」2017年9月8日放送VTR)

### 5 議事内容 2ページ以降に記載

6 審議期間の答申または改善意見に対してとった措置及びその年月日

7 審議機関の答申または意見の概要を公表した内容・方法及び年月日

(1) 2017年9月8日(金)「猫ひたプラス」(12:00～12:15)の

「放送番組審議会からのお知らせ」コーナーで審議内容を司会者が報告

(2) 審議概要を当社インターネットホームページに掲載

近藤編成部長            それでは定刻になりましたので、第378回テレビ神奈川放送番組審議会を始めさせていただきますと思います。よろしくお願いいたします。

山田委員長            プロ野球もセリーグは昨日広島が優勝しましたが、実はそれ以上に3位争いの方に今、熱がこもっているのではないかと考えております。今年の夏は雨が多く、夏らしい気分はなく、横浜高校も甲子園では早くに敗退してしましまして、この秋こそジャイアンツが出るのか、ベ이스ターズが進むのか。クライマックスシリーズに非常に焦点が定まっております。この秋なんとか盛り上がっていきたいと思います。それでは第378回目の番組審議会を始めさせていただきます。中村社長、よろしくお願いいたします。

中村社長                中村でございます。皆様、ご無沙汰いたしまして。本日もお忙しいところをありがとうございます。先月はお休みということで、その間に北朝鮮ではバンバン、ミサイルを撃ったりということで、森友も加計も吹っ飛んだということでしょうか。28日の臨時国会召集日に解散という、10月22日という予測というか、ほぼ報道によると本決まりということですが。実は29日に横浜マラソンがございまして。29日になるとわが社は大変なことになってしまうと。どうせやるなら22日にやってほしいと考えておりますが。そういう意味でここにもおりますが、報道の方では新しいこれからの1か月になろうかと思いますが、選挙報道も含めて一所懸命いろんなことをやっていかないといけないなと思っています。委員長もおっしゃっていましたが、ベ이스ターズの行方ということもあって、わが社も9月の末ぐらいの、27と29の阪神戦と、あと10月4日の地元最終戦のベ이스ターズの中継も特別にまたやろうということで動き始めています。去年同様にクライマックスに進んでくれれば、また広島だったり、試合もできればなど考えております。本日もよろしくお願いいたします。

山田委員長            それでは、本日の議題に沿って進めてまいりたいと思います。まず放送番組

について。これはお手元のタイムテーブル、特番一覧表を参照していただきながら、事務局からお願いいたします。

近藤編成部長

まずお手元にごさいますタイムテーブルからご紹介させていただきます。9月号のタイムテーブルですが、表と裏、今回は女子サッカーのノジマステラを10月7日にオンエアがありますので、表紙にさせていただきました。ノジマステラは2017年からなでしこリーグ1部に昇格して、活躍が期待されている地元チームです。めぐりまして9月7日、これは終わってしまいましたが、ノジマさんのベイスターズ冠試合で私どもの「関内デビル」、このMCを務めています加村真美さんが横浜スタジアムで始球式を行いました。この模様は後ほど番組でもオンエアさせていただきたいと思っております。その後は「tvkメディアランナー決定」ということで、10月29日に横浜マラソンが行われます。この中に人気番組のレギュラー陣ということで、「猫のひたいほどワイド」の八神さん「部活応援プロジェクトしゃかりき」の中尾さん、「ハマナビ」の佐藤さん、「カナフルTV」の田崎さん、「猫のひたいほどワイド」の岡村アナウンサー、この5人がtvkを代表してフルマラソンを走ります。こちらもマラソンの中で注目していただければと思います。この後時代劇と、伊藤政則さんの「ROCK CITY」ですが、放送1千回ということで、長寿のハードロック番組になりました。これに放送1千回を絡めましてイベントも企画しています。タイムテーブルは飛ばしていただいて、一番最後の方ですが、これも終わっていますが、横浜ベイスターズ、9月5、6、7の3連戦です。先ほど社長からご紹介がありましたが、9月27日からの3連戦、27日と29日の2試合。28日はNHKさんが放送権を持っていたのでできませんが、その阪神戦と、今のところ10月4日に予定されているホーム最終ゲーム、中日ドラゴンズ戦の放送を予定しています。その後「横浜銀行カップ」これも毎年恒例になりましたが、「神奈川県学童軟式

野球選手権大会」ということで、9月24日日曜日の19時から20時で編成させていただきます。開局45周年イベントということで、「激動昭和の時代を駆け抜けた銀幕のスターたち」。10月6日の「大相撲横浜場所」こちらを紹介させていただきます。また「tvkの人気番組がプラザ横浜に大集合」、こちらの方も終了してしまいましたが、この3連休とその前の週でした。16日17日はちょっと台風でいろいろ懸念されましたが、キンシオさんのイベントに140人ぐらい来ていただき、「関内デビル」の方もかなりたくさんの方に来ていただきました。その後のスペシャルプログラムは後ほど単発番組一覧でご紹介させていただきます。タイムテーブルに関しては以上になります。続きましてはお手元にあります「特別番組一覧」を紹介させていただきます。頭の方から9月24日に「じゃ、西さがみでも行くか！って「西さがみ」ってどこ？ザ・スペシャル！！」。こちらは前回の放送番組審議会で8月の特番としてご紹介しましたが、西さがみ、小田原、箱根を舞台にした短編映画のご紹介ということで、バラエティ番組になっております。9月24日「核の脅威なき未来へ～神奈川から世界に継承される平和の心～」。こちらは営業持ち込みで原水爆禁止宣言から60年ということで、創価学会さんのご提供で番組をオンエアさせていただきます。9月24日の「横浜銀行カップ」。こちらは先ほどタイムテーブルでもご紹介させていただきました。8月26日から9月9日チーム数42チームで行われた「神奈川県学童軟式野球選手権大会」のダイジェストをこちらでオンエアいたします。その後24日、22時30分、「スズキ スイフト スポーツでいこう！」。これはスズキさんから、9月12日にスイフトスポーツが発表され、9月20日に発売されますが、「クルマでいこう！」の岡崎さんと「クルマでいこう！」形式で特別番組として編成させていただきました。9月28日29日に「神奈川県議会中継」がございます。知事提案説明および代表質問の答

弁。29日は代表質問と答弁になります。9月30日は「横浜市会ダイジェスト」。こちらは第3回のダイジェストでお届けします。10月1日「ゴスペルのチカラ！～シロウト100人Sing For Life！！」こちらも営業持ち込みになっていますが、毎年5月から横浜関内ホールで一般募集しているゴスペルのワークショップ。終了の時は関内ホール大ホールで終了公演という形ですが、こちらをダイジェストでお送りします。10月1日「Fate/stay night」こちらはtvkでオンエアしていたアニメ作品の映画特番になります。10月7日なでしこリーグ、こちらが先ほど表紙を飾ったものです。相模原ギオンスタジアムから生中継でお送りします。10月8日「アメリカンフットボール Xリーグ中継」はパナソニック対富士通。こちらの方は10月1日ヤンマーフィールド長居で行われた試合を1週間遅れで20時から21時20分で編成します。10月9日こちらは「秦野たばこ祭」。9月23日に行われる秦野たばこ祭、これも恒例になりますがダイジェストでお送りします。その後10月9日12時30からは毎年恒例の編成で、秋田テレビさんの「十和田八幡平駅伝競走全国大会」、8月5日に行われた模様をお送りします。10月12日「ヨーロッパ企画の暗い旅スペシャル～出てこようとしているトロンプレイユの旅～」ということで、こちら、レギュラーでもヨーロッパ企画さんの番組をオンエアしていますが、10月にKAAT公演を控えています、そちらのチケット販促も含めた特別番組になっています。10月18、19、20と、「神奈川県議会予算委員会中継」があります。10月21日から25日は「秋季関東地区高校野球ダイジェスト」。こちらは会場が神奈川県です。毎年担当県が変わりまして局も変わりますが、今回は神奈川県開催ということでtvk幹事、tvk制作で編成されます。その後10月22日「やみつき伊豆満喫の旅」、10月22日の「近鉄特番」こちらも観光特番となっています。10月28日「富士山麓日記スペシャル～2016秋・冬編～」、YBS山梨放送

さんがカメラマン伊藤浩美さんの厳選した貴重な山麓の映像を、山梨放送さんがレギュラーでやられている番組ですが、こちらをダイジェストでオンエアします。10月29日日曜日8時から15時30分、長丁場ですが、「tvkスポーツスペシャル横浜マラソン」をお送りします。その日の夜に「アメリカンフットボールXリーグ 富士通対オービック」この日は横浜スタジアムで3試合開催されているんですが、そのうちの1試合の富士通対オービックを放映します。10月31日「僕たちの小トリップ」ということで、今回は「猫ひた」に出ている三上真史さんと同じ事務所の中村昌也さん、この二人で新潟県の妙高、上越地方を旅していくというドキュメンタリー番組です。先ほどお話が出ましたが、10月22日に総選挙が行われることになると、こちらにおそらく政見放送と開票速報等々をまた編成していきますので、若干こちらは変更があると思いますが、現時点での9月10月の特別番組一覧ということでご紹介いたしました。以上です。

山田委員長 ありがとうございます。事務局から9月10月の放送番組について説明がありましたが、これについて何かご意見、ご質問等がございましたら。10月6日の横浜場所というのが大相撲ございますよね。これは放送するとなると相撲協会の方に、そういう。

近藤編成部長 はい。

山田委員長 他にございませんか。ないようでしたら、今日は視聴合評で大変重い番組と  
いうか、切ない番組になっていますので、それにできるだけ時間をかけたい  
と思いますのでよろしくお願いします。他にないようでしたら視聴合評に移り  
たいと思います。

近藤編成部長 視聴合評は報道特別番組『「見えない壁」～津久井やまゆり園事件から1年』  
ということで報道局の嶋田局長と遠藤部長も出席させていただいておりま

す。

#### 視 聴 合 評

山田委員長

多くの人知っている大変衝撃的な事件でしたが、改めましてこの番組の制作の意図をお伺いしたいと思います。

嶋田報道局長

私から先にお話した後に、遠藤の方から、事件自体は皆さんの記憶にも、大いに良くない意味で印象に残った出来事だったんじゃないかと思います。我々も神奈川県で19人が亡くなる、そして多くの入所者の方、職員の方がけがをするという事件が神奈川県で起こるなんてことは、よもや思いもしませんでした。そして事件が起きた後、我々も継続的に当日を含め、ニュースを報道してまいりました。ただ、そのときに皆さんも我々以外のテレビを見てもそうだったと思うんですが、被疑者、今は被告になりますが、彼がどういう考えを持っていた、どういう行動に出たということばかりが伝えられると。我々もどちらかというと、そういう情報を出すことが中心になっていた。その背景には、今回特に亡くなった方19人が犯罪の被害者であるにもかかわらず、名前が匿名での発表だった。そして各メディアが匿名で伝えていると。まずこのところに直面しました。そしてこの事件の被害者側がどのような思いだったのかということ、なかなか伝えることができなかった。報道しながら非常に迷いと、どうしたらいいのかという思いを積み重ねながら、取材に当たった記者も思ってきました。そして本来、神奈川新聞の林さんがいる前で何なんです、本来報道は実名を伝える。そして匿名にする場合は、何らかの理由が必要だと。なぜ匿名にしなきゃいけないのか。今回我々も、被害にあった方がなぜ実名で伝えられないのか。なぜ隠されなきゃいけない立場になるのか。被害にあったにもかかわらず、そして何の落ち度もないにも関わらず、やはり隠して伝えなければならないのかということにぶつかる。そしてそれは遺族の

方の思い。その背景には、これまで障害を持っている方が置かれていた環境というものに、我々マスコミが実は正面を向いて向かい合っただけでなかったところも感じさせられました。その答えは出なかったんですが、そのためには、地元のメディアとしていつまでも伝え続ける、そしてその中で我々なりの答えや、我々なりの事件に対する役割を果たしていく必要があるのではないかと考えています。そして今回、事件から1年ということでこのような番組を作り、それに対する感想は皆様方から積極的にいただきたいんですが、記者もそれぞれ報道部長の遠藤も含め、携わった人間それぞれの思いを感じながらやっています。我々としては、この1年でこういう形で伝えました。そしてその先もやはり伝えていくことが必要なのかなと。そしてやはり被害者と家族の方が、なぜ名前を隠さなきゃいけないのかということ。そしていつかはこういうふうな、被害者が人生を歩んで行ったということを我々が伝えられるような形になればいいなど。それが亡くなった方々への、せめてもの我々ができることではないかと考えています。そこは無理やり情報を引っぺがして、隠したいものを無理やり出すのではなくて、やはり「こういうふうに伝えてほしい」という思いになっていただくことができれば、そのためには我々が信頼感を持っていただかなきゃいけないという思いで。だいたい私の個人的思いも今の言葉には含まれているんですが、そのような形で。どうしてもやはり他局はだんだん伝えられなくなると思うので、そこで我々が神奈川県を預かるメディアとして、今後継続していくことが大事なんじゃないか。それが今回の事件の背景に潜むものに正面から向き合うことになるのではないかと考えています。あと、番組については遠藤からお話をさせていただきます。

遠藤報道部長

企画にもっていくまでの意図は、今嶋田が申し上げたところなんですが、番組全体でお伝えしたかったのは、植松聖が、「障害者は安楽死させるべき存

在」ということを、これはとんでもない考えなんです、とんでもない考えと言いつつ、ネット上ではそれに賛同するような意見があったりとか。あるいは社会を見ても、誤解を恐れずに言えば我々の中にも、本当にそれを「絶対そうじゃない」と言い切れるものが本当にあるのかという問い、そういう部分が最初にありました。取材を続ける中で、たとえばグループホームの方であるとか、あとは尾野さん、親御さんの取材をする中で、記者それぞれが、それぞれの方は重い障害を抱えていらっしゃるし、もちろん生きたいと思っているし、楽しみも持っているし、目標も持っている。そういうことが取材で触れていく中で、非常にそれが実感できたところもありまして。それを何とか番組で訴えたいというのが、大きなものとしてありました。構成としては最初にその事件をおさらいして、植松のああいう手紙を紹介しながら、家族の考え、グループホームにお住まいの方の考え。あとはいろいろな団体で活動していらっしゃる方の考え。そういうところを、障害の当事者の生き方を選ぶことで、それを訴えられないかなというふうに思ったのが一番大きいところです。細かくはご意見をいただいて。

山田委員長

ありがとうございました。それでは委員の皆さんからご意見などをいただきます。いろいろ質問が出るかと思いますが、重複するケースがたぶんあると思いますので、最後にまとめてお答えしていただければと思います。ではトップバッター、二宮さんからお願いします。

二宮委員

先ほど局長さんから話があったように、この事件、7月ですよ。1年を機会にいろいろなテレビ局が「その後」ということで取り上げていました。これは課題をいただいたというのもありまして、注意深く見させていただいた部分もありますが、基本的には彼の異常な行動。その考えが1年たっても変わっていない。そのことについてレポーターや有識者がいろいろな意見を出したり批判

したりということに終始していた。これがやっぱり報道だったと思うんです。普段の私ならそれだけで終わったと思うんですが。一方、この番組は彼が要は「不要なんだ」とか「排除」とか考えた障害を抱えた人たち、そちらに焦点を合わせて、一般社会との隔たりの中で前向きにどう生きているのか、そしてそれらを支える人たちが必ず存在している。そういうことを栄区とか戸塚区とか、厚木だとか、私どもの身近に感じられる場所を対象に放映していただいたという、身近な立場で見られたなというふうに。これはまさに地元のテレビだからこそできたことなんじゃないかなと思いました。タイトルは「見えない壁」ということで、正直自分の周りで重度の障害を持っている人たちとのかかわりは、正直ありません。そんな中でどういうふうに接したらいいかもわかりません。いざ対峙したときに、本当に大きな壁が存在するんだらうなと思いました。テレビにもありましたが、社会から壁で仕切られていると、そういうふうに感じました。彼らに対して直接手を差し伸べることは、なかなか機会があることではないと思います。せめて支援している人たちに、我々がどんな手伝いができるのかということ、ぜひ引き続きいろんなところで取り上げていていただきたいなと思いました。最終的には先ほど言われたように、弱い立場の人たちに健康な人たちが、相互扶助という気持ちを持って接せられることの大切さをぜひ伝え続けていただきたいなと思った、非常に自分の中でも深い気持ちを持たされる番組でした。ありがとうございました。

山田委員長

ありがとうございました。続きまして五大さんお願いします。

五大委員

いろいろなことを考えさせられました。まず私は母親の視点で見てしまうんですが、もし自分の子供がこうだったらどうなんだろう。ずいぶん前に高齢で出産するときにそんな子供が生まれる可能性が多いということで、すごく考えたことがありました。でもこうやって母親の立場で、自分の実際の子供がこうなっ

たときに、どこまで子供たちと一人の母親として対峙していけるのかなということ  
をまず考えました。そしてこのテレビを見て、尾野さんのお父さん、お母さん  
の態度を見て、そこに限りない愛を確認しました。そんな中で、私事ではあり  
ますが、私の芝居を見に来てくださる障害者の方がいます。当初はパーキン  
ソン病になりたてで、「死のうかと思った」と、人に支えられて見に来ました。そ  
れから15年以上の月日が経ちました。病気は進行してどんどん体も動けなく  
なって、今施設も転々としています。でも彼は詩を心から伝えようとして、動か  
ない手と口で、今はだれもいなくなってしまうと、支えてくれる人に伝えて詩  
を書いているんですね。ある一編の詩が心に残っています。「僕にとって障  
害はアクセサリーだと今言えるんだ。だからどんなことにも前に向かって生き  
るんだ」と。今は箱根の山奥に行ってしまいました。そんなことすら伝えること  
すらできなくなって。「でもローザが見に行きたい」と人づてに伝えられて、で  
もそのためにはたくさんの人の手を借りなくちゃいけないからと。だめでした。  
そんなことも私の中で行き来する中で、この事件を考えたときに、まだたくさ  
ん、答えの出ないものが自分の中にあります。ただ「障害者はいなければい  
い」という26歳の彼の言葉に対して、この番組は少なくとも事件を受けた人の  
心の傷、裏でそれを支えようとする人の心と姿、そしてなにしろ障害を受けた  
人が生きていこう、おしゃれをしよう、生きようとする力を伝えようとしていたと  
思います。やはり最後に嶋田さんがおっしゃった、継続してこそ正面から取り  
組むことになるとおっしゃった言葉が、番組作りの焦点だと思いますが、これ  
からも継続して、私もそして見た人たちに問いかけ続けられるような番組を、  
この後も作ってほしいなと思いました。そして模索中でありながらも、  
「障害者はいなければいい」ということに答えようとした姿勢に、私は胸がいつ  
ぱいになりました。継続してください。

山田委員長

ありがとうございました。続きまして、白石さんお願いします。

白石委員

障害者を殺すなんてとんでもないことです。3年ぐらい前に、ようやく重度の子供を施設に入れた人がいます。ひとりで抱えきれない、大きくなっちゃって。その施設で父兄会会長を仰せつかったんですね。自分はようやく施設に入れたので、「皆に頼まれたから」と受けたんですね。受けたんですが、父兄会を何回か会合をやるんだそうですが、父兄が来ない。預けっぱなし。尾野さんは本当に珍しい人です。親が冷たいという。つまり壁がある。障害を持った親ですら、親戚ですら、ご苦労をなさったんだなど。父兄会には来ない、原因はわからない。見えない壁、これをテレビや新聞では書けないと思う。本当に自分の子供を最後に死ぬまで面倒を見るというのではなく、施設に預けてしまうとホッとして自分の義務を放棄してしまうのではないかなと、そういう壁みたいなものを感じました。それが一つです。重度の障害ではなくて、これから老人が長生きしてお年寄りが増えていきます。私の知っている人は老人病院に入ったんですが、意識を失って10年生きたと。これもこれからの社会問題になってくるかもしれません。自分の親、子供より先に死ぬ。重度の障害と同じように意識をなくして10年も生きていかなくてもいけないんだということに、だれが手を差し伸べるのか。医療は面倒見も良くなっていますが、増えているんです。私もそういうお年寄りの見舞いに行ってみますと、すさまじい。大きなところにベッドがあって、老人が入っています。「俺の金が盗まれた」とかベッドに縛られて騒いでいる。そういう時代が。家族が預けているわけです。朝か夜かはわからない、騒いでいる。そういう時代が進んでいる。私の親戚も病院はいかないと。1年前に死んだんですが、食べるものが食べられなくなると水だけで、点滴はだめだと。点滴させないと。がくんときて水が飲めなくなると1週間で。看護婦が来ても点滴を断って。これは自分の兄が苦労して病

院で手術されて死んだということを知っているらしい。「絶対に病院に入らない。点滴はさせない」と。要は大きな問題だね、これから。匿名でやってくださいというのは父兄なのかよくわかりませんが、それはあるんですかね。実名でやってくださいという人は。なかなか大変苦労している。そこにもっともっと行政が対策を打っておかないと。衆議院議長に手紙って、あれはとんでもないよ、おかしいよということじゃなくて、実態が。匿名でしか新聞が出せない、そういう実態なんだから、もっと政治もちゃんと対応しないとこの問題は広がっていくんじゃないかと思いました。

山田委員長

ありがとうございました。委員の皆さんはいろいろな経験を重ねていますのでこうした問題については思いもあると思いますが、番組中心にひとつコメントの方をお願いします。番組の内容についてということでございますので。続きまして伊藤さん、お願いします。

伊藤委員

番組のタイトルはとても良いと思いました。いろいろなことをいろいろな方が考えるきっかけとして、とてもいいタイトルだと感じています。「見えない壁」という、これは番組を見て、そのまま差別という意識が、犯行者からそうではない一般の方にもみんなにもあると言っていました。番組を見て実際わかったこととしては、やまゆり園という障害者の50年以上続いた施設のある秩序と、全く関係なく、突如、勤務者でもあった別の考えを持つ犯行者が起こした、50年以上続いたある秩序をぶち壊してしまったという、非常に残酷な事件であり、実際にtvkさんはやまゆり園の方、それから障害者の方が生きていくためのヒントやキーワードについて、深い焦点を当てていましたので。そこはtvkの報道の姿勢として、とても素晴らしいと思います。他局で「感動ポルノ」と呼ばれるような24時間続ける番組がありましたが、それに同じ時間に対抗して公共放送が「バリバラ」という番組で、障害者の自立というものを勇気をもつ

て声をあげると。いろんな立場でいろんなものがあると思ったんですが、そうやって意識を視聴者が広げるという意味では、窓のような存在で、一番見る方にとって深くそれぞれ考えるきっかけをくださる、窓のような存在でこの番組があってくれたこと、それから「継続したい」とおっしゃっていただいたことは、とてもいい意味で印象に残りました。私は差別ということに関しては、この番組が与えてくれたヒントというと、障害者に対する社会の差別ということが非常に明快だったんですが、そこからいただいたヒントとしては、さきほど白石先生がおっしゃいましたが、後期高齢者にも近い問題がある。あとは難病の方と接することがあって、さっき「感動ポルノ」といった24時間テレビに私もお手伝いしたので。福井県の2千万人に一人と言われる成長型の寿命が短くなる男の子が非常にいい絵を描くので、それをアニメーションをするということで、実際に行って本人と作り上げました。そのとき家族と話したのは、わざわざ見せてしまうことで、開き直る強さみたいなもので、やっていくしかないという、結構覚悟の上のものなんですね。これは尾野さん一家にも通じる、安全ばかりではないけど、勇気をもって実名公開する方の存在も知ることができたし、そこでは実名で何か発言していくということは、日常の自分たちにも必要な勇気だなということを与えてくれたような気がします。そういったことを深く考えさせてくれるいい番組だったと思いました。以上です。

山田委員長

続きまして林さんお願いします。

林委員

取材班の皆さんは大変なご苦勞ではないかと思います。遠藤さんがおっしゃいましたが、我々がうちに抱えている「内なる排他性」という言葉をわが社では使いましたが、それをどう乗り越えていくかということ、社会の現実に向かうという姿勢は非常によかったかと思っています。教えられたこともたくさんあって、共生社会を体現しようとしている方が、私が考えているより大勢いらし

て、みなさんが非常に前向きだったということは、この番組を見て教えられたことの一つです。それから取材する立場としては当たり前といえば当たり前でしょうけど、尾野さん夫妻、尾野さん家族に長い時間密着して取材したからこそ、あれだけの、カットされた部分はかなりありましたけど、彼の心の内なる言葉が引き出せたんじゃないかと思います。それはよかったんじゃないかと思います。そういったことを踏まえて、何点か気づいた点を、今日はメモを見ながら話をさせていただきたいと思います。この番組は被告を含めた関係者の考えと思い、それから施設の再建論議、それからこれは壁を乗り越えようとする人たちの活動という3部構成で成立していたんじゃないかと思うんです。まず被告の思い、考えとして、彼は非常に特異な独善的な考えを持っているわけですが、教員になろうとしてなれなくて、それと彼のお父さんが教員だったということ。その連関の中であいつの歪んだ考え方を持つに至ったんじゃないかということ、誰かにといてほしかったなというふうな気がしています。そういう試みはやろうと思って、そういう時間的配慮もあったと思うんだけど、それはちょっと聞きたかったなと。それと「時間と金の無駄遣いだ」というようなことを彼は考えているらしいけど、そういった考えを醸成したのが職場での仕事を通じてであるとすれば、それはどういった思いの中に、端々に見られたのかということは、園長をはじめとして職員も知っているはずだから。職員は、たしか黒岩さんたちと、ちょこっと出てきたぐらいだったので、時間をとって話を聞いてもらいたかったなということがあります。それと、見えない壁を浮かび上がらせる手法として3点あったのではないかと。ひとつは尾野さんという方は、名前を出して積極的に取材に応じた。そうでない方がたくさんいらっしゃるわけで。委員の方の話も出ましたけど。当然そういった方たちにアプローチをしたんでしょうけど、どなたにも聞いていなかったということ。これが現実で

あるわけですが、そこを何とか乗り越えて、彼らの言葉を聞けば、見えない壁とはどういうことかということが、もっとストレートに伝わってきたはずだということですね。そこに問題のネックがあったはずですから。それと再建論議の中で施設は小規模化、分散化でいくわけだけど、これはノーマライゼーションの流れということでは理解できますが、それでも尾野さんは最後まで大規模施設に固執されていましたよね。彼から「なぜなんですか」と。それについて再建論議の場面でもそこはなかったんじゃないかなと思いましたから、「なぜそこに固執されるんですか」と、そこにも見えない壁の一端が出てくるんじゃないかと思いました。それから、今日の番審ではカットされていましたが、ロックバンドのリーダーが、さっき嶋田さんがおっしゃったようなことをおっしゃっていましたね。事件の被害者の名前が出なかったことに、非常に心が痛む思いたと。彼はその後いろんなバンドで歌を歌っていましたが、もっと彼を掘り下げて聞いてほしかったですね。バンドで歌を歌ってもらうより、「なぜあなたは、そういうことを思ったんですか」と。それと、見えない壁というのはおそらく内なる排他性であろうかと思っていますが、それがもっと身近に見るものには直截的に伝わってきていなかった気がします。番組そのものとは本当は関係あるんですが、事件が起きた後に精神保健福祉法改正問題が出てきましたね。あれは要するに、植松被告は措置入院をしていたけれど、その絡みで法律の改正が出てきて、それについてはいろいろ問題があるということで議論になったわけです。問題の素地を追及するのであれば、そこまで突っ込んで描いてほしかったなという思いがあります。いろいろ注文を言いましたが、そういったことです。

山田委員長

ありがとうございました。続きまして吉川さんお願いします。

吉川委員

冒頭で嶋田さんと遠藤さんのお話を伺って、本当に同じ思いでいたんだなと

ということがよくわかりました。最初に番審で、お題が津久井のやまゆり園を取り上げるということを言われたときに、私はまた植松の心の闇とか、なぜ犯行に及んだのかとか、そういうことを分析する番組になっちゃうのかなという思いでいました。でも、だったらそこで限界だなと思っていたんですが、そうでなかった。というか、私はむしろ、彫士とかああいう部分は今回もなくてもよかったんじゃないかと思っているんですが。この事件はたくさんの犠牲者が出たという意味で悲しいだけではなくて、もっと暗い気持ちにさせるのが、遠藤さんもおっしゃっていたように、植松ほどじゃなくても、ネットでそれに賛同する。殺しちゃうまで、そういう狂気までには至らなくても、そこに賛同し続ける人がいて、別の局がインターネットでずっとこの問題を掲示して、私も見ているんですが、そこにご遺族の言葉にもあったんですが、「大変だけど、よかったじゃない」と言われたという。近所の人からそういうふう言われたと。お兄さんだったかを亡くされた方が、とても悲しかったどうけど、よかったじゃないと言われたと、そういう生の声が載っていました。未だにご近所の人、きっと善意で言ったんだと思う。でもその人の価値観ですら、そうやって障害者の存在を否定してしまっている。濃淡はあれど、私たちの中にもそういう気持ちがあるんじゃないかというのが、この事件の与えた非常に深い闇なんだと思います。そこにまさにお二人が問題意識を持ってくださっていたということは、本当に素晴らしいことだと思うんですが、それをメディアの番組にするというのはある意味難しいと思うんですが、もっとむごくえぐっちゃうてもよかったんじゃないか、テーマ性を持たせるのであれば、というふうに私は思いました。いろいろあるんですけれど、いくつか課題があって、まずなぜ被害者の方が、19人の命が未だに匿名なのかという問題。これはストレートに壁ということに結びつく問題だと思います。ある公共放送ですが、19人ひとりひとりの人となりというものをわ

かる限り取材してネットに載せています。その中にはご家族が似顔絵を描いていい、というところまでおっしゃったご家族もありました。そういうご家族にもうちよつと声を聴いてほしかったと思うし。尾野さんのお話しというのも非常にいいお話で、特に血のつながっていないお子さんをお父さんがあのように真摯に向き合って、しかも意識が戻ったら「お父さん、父さん」と連呼してもらったときに、「この子は俺の宝なんだと思った」と、本当に当事者じゃなえれば語れない。でも彼のご子息が非常にかけがえのない存在なんだということ、非常に伝えるエピソードというか、あの場面が撮れたのは素晴らしかったと思います。が、一方で尊い命を失ったご遺族の中にも、やはり人となりというのがなかなか伝わってこない。それは皆さんが閉じこもっちゃっているから。でもその中にも、じゃあその人たちが価値がなかったということではなくて、家族にとってやはりそれぞれの思いがある存在だったんだということ、もうちよつと伝えてもらえたら、また違うアプローチで伝わってきた部分があるんじゃないかというふうに思いました。それからやはりきれいごとではない問題として、毎日障害者の方と向き合って日常の介護をするのは本当に大変なことで、それがあのグループホームの映像からも多少伝わってきたということはあるんだと思いますが、この問題の中でもう一つ問題になっているのは、さっき白石先生がおっしゃったことと関わっちゃう、誤解を与えるかもしれませんが、やはり「お前たちは、施設に預けていたじゃないか」とご家族は言われる。あるいは施設に19人の命の犠牲者になったご遺族の中には、自分が預けてしまったことを今でも悔いている、自分を責め続けているご遺族もいらっしゃるということが、他の局の報道とかでもあります。でも現実、やはり障害児をずっと育てることの大変さ、それはご家庭だけで抱え切れる問題じゃなくて、みんなが助け合って、あるいは社会資源も借りなければ、それは本当に無理だとい

うことを、私たちが理解していかななくてはいけない問題だし、それを施設に預ければなしじゃないか、と親を責めることはできないんだということをきちっと伝えてほしい。それから未だに19人のご遺族の中には、ご自分が施設に預けたことを自分の罪のように感じていらっしゃる方もいるんだということを、ぜひ伝えてほしいなと思いました。家族会で意見が割れた。これもやはり壁に対する今の社会の現状だと思います。林委員もおっしゃっていましたが、あの尾野さんも未だにやまゆりの再生、そのものの状態であの施設をまた作ってほしいと、大型施設を望んでいる。でも障害者の団体の中には、それが壁なんだと。囲ってしまうのではなくて、社会の中で健常者と障害者がもっと自然な形で触れ合える機会を、もっと持つことが必要だと言っている。でもその考えもあるけれど、まだやはり身近に障害児を抱えている親御さんとしてそこに踏み切れない現実もあるんだということを、きれいごとではない世界の中で重い問題があるんだということをやはり丁寧に拾ってほしかった。まだ、だからこうだという答えを出せていない私たちという、悩みを見せながらでもいいんですが、そこまで踏み込んでもらえたらなと思いました。やはりひとりひとり素晴らしいんだということを、伝えていただく、テレビならではの絵があるわけで。そういう意味では尾野さんのエピソード、語ったお父さんの、お話をされていたときの表情もそうですし、松山千春の歌を聴く鈴木幸子さんも、ある意味顔の表情のアップは障害のある姿を映し出すことで、それも失礼かなと思うこともあるかもしれませんが、そのちょっと歪められたお顔の中からも、本当に松山千春の歌を喜んでいらっしゃる姿に、正直私も心を打たれましたし、そういうものがテレビの力なんだなと感じました。そういう中で残念だった細かい点ですが、唯一この番組の中でレポーターの声が出てきたところがあったんですが、それがその尾野一矢さんに「芹が谷は好き？」「津久井は？」「七

沢学園は？」と聞いているんですが、そんなことを障害児、しかもやまゆりの後遺症で自傷行為で不安定になっている彼、一矢君に、そんな質問をぶつけてどうするの？というのが私の中にはあって。たぶんあのコメント、いろんな取材をする中には長い時間一緒にいられたんであろう、そのレポーターの質問はとても残念で。しかもそれがあの中に入ったというのが、非常に残念でした。もし冒頭にお伝えいただいたように、嶋田さんや遠藤さんの制作者としての思いが本当におありだったら、そんな障害を持つ一矢さん、事件で非常に怖い思いをした一矢さんに「津久井はどう？」って、そんなことを聞く必要はないんじゃないかと私は思いました。ですから、やはりもっと続けていきたいとおっしゃったお気持ちを私も信じますけど、そうであれば、やはり番組ですから制作費とか時間とかいろんな制約はあると思います。某公共放送のように潤沢にはできないかもしれないけど、でもなるべく寄り添う時間を多くする中で、むごいことでも難しい問題ですけど、それをある意味ストレートに深く掘り下げるぐらいの覚悟を持った番組を、ぜひ次回も作っていただきたいなというふうに思います。以上です。

山田委員長                      ありがとうございました。いろいろ反論したい部分もあるかと思いますが、後ほどお願いします。では布施さんお願いします。

布施副委員長                    なかなかコメントできないんですけど。たぶん非常に難しい問題を含んでいるので、深入りしたくないなど。深入りしていくと本当に難しい問題になるから。植松被告は国のために自分がやってやったんだと。犯罪を犯している意識がないと思う。どのようにこの裁判を進めるかと言ったら、結局本人が意識していないんだから、全然。殺人罪なんか犯せば大体どこかで悪いことしたなという気持ちはあるんですよ。私も弁護士だったということもあるんですが、そういうのはあるんですよ。けども、犯罪を犯した奴がそういう悪いことはして

いないという意識を持っていると、どうやってこれ、いわゆる殺人罪にしていくのかと。やっかいなんで、そういうことはたくさん起こるので。この場合もそうなんで、なかなか難しいことになる。それが何かというと、同時に戦争犯罪を、本当に国家がどのように犯して、国家がどのように罰せられるのかということ、またまた繰り返して検討しなおす時期に来ているんですよね。いろいろな雑誌とかもそうですけど、日本の場合も、果たして東京裁判は正当な裁判だったのか。手続き的なことだけじゃなくて。国家は戦争をするのは国際法の基本的権利だけど、その権利を行使したというだけで、違法行為をしているのかと。ドイツもそうだけど、ニュールンベルグもそうだけど。だけどドイツの場合は単なる戦争をただじゃなくて、ユダヤ人とかたくさん殺したということがあるわけ。だからそれに対してはやはり国際法違反だということにニュールンベルグでなって、それで戦争犯罪人として指導者は全部絞首刑になったでしょう。で、日本はどうなったの。そういう国際法違反の証拠が挙げられて判決が下ったのかということ、ニュールンベルグと合わせて東京裁判を検討してみるとどこにも見つからない。やはり戦後のどさくさの中で、ある意味で国家間の権力構造の中で、あれはお前らがやったんだろうというだけで。本当の意味での犯罪として成立していたのか、当時の法律に従って、ということはいまだにわからなくて、そういうことを研究している方たちが、もう一回元に戻ってもう一回研究を始めるというそういう時期に来ているんだよね。だから、それは国家だけど、この植松を裁判する過程で、植松がそういっているんだから、本当にそうだったのかと。そうじゃないと、あのニコニコしていつも笑っていて満足そうなあの顔は、犯罪者の顔かって、通常犯罪心理学をやっている人は疑問に思っちゃうわけ。それをいろいろ解きほぐして裁判するのは意外に難しいということが言えると思う。そうすると、この事件は今後様々な大

きな問題を抱えています。どのような形で解きほぐしていったらいいのかが、大きな課題になっています。その中で最も大きな課題は、実は我が国の政府が直接やったわけではないよ、この犯罪。だけど、そういうものを容認するような社会的な風潮があるのではないか。それを植松が自分勝手に解釈して、自分はそういう政府の立場に立って、そういう病気の人を抹殺してきたということが正当な行為だと主張しているでしょう。だからそのへんのところをどういうふうに考えていったらいいのかと。非常に難しい。戦争裁判の中では、ニュールンベルグのときは、ナチスの犯罪は、本当に犯罪だったのか、単なる戦争行為、戦争にまつわるいろんな行為を、戦争犯罪として裁いたのか、それを超えているのではないかという主張は、ずっと今でもあるんです。そういうことを考えてみると、植松の犯罪は結構大きな。日本人我々はどういう意識で、それを考えているのか。ひょっとすると俺たちそのものが、広い意味で犯罪の加害者だったのではないか、あるいは今後もなり続けていくんじゃないかという、そういう疑いすらも、そういう事件だから。ちょっと簡単に、あるところで殺人事件が起きて、被害者の方が偶然、潜在的な病気を持っている人だったので、それはかわいそうだよということでは済まないじゃないの、そういうぐらい複雑な背景を持っている事件というふうに通常見えていますけどね。だとするとテレビの方も、どういうふうに分析するのかということも意外に責任が重いと思う。そう簡単に「はい、はい」と言ってテレビ化するだけでは、なんともならないじゃない、と私はすごい勇気があるなど。勇気があるんだったら、将来どういう形に発展させるのか。そういう思想的背景をもってテレビ神奈川はこれをやったのということを知りたいと思いました。以上です。

山田委員長

ありがとうございました。今の布施さんの意見も最後にまたいろいろ。私はこの事件は昨年7月、宮崎県の延岡市に取材で滞在していたときに知りまして、

本当に大変衝撃的な事件でした。今回このドキュメンタリー番組を拝見して、いろいろな制約の中で、よくここまでまとめて番組にしたなという思いがあります。具体的に言えば、この中で一番関心を持ったというか、一番興味を持ったのは加害者の移動ルートなんですね。移動ルートと殺人を犯した場所を非常に鮮明に浮き彫りにさせている。これは他の新聞などでも取り上げていたんですけど、今回のテレビ神奈川の番組の中で、よりよく鮮明にその辺の移動ルートが浮かび上がってよかったなと思います。と同時に、この番組を拝見しながら、昭和56年の秋に、広島県の同じようなこういった施設を取材したことがあります。それは先ほど嶋田さんがおっしゃっていたように、当時は今ほどではなく、まだ隠すというようなまきに見えない壁であって、取材が難航したことを覚えています。写真はほとんど撮れない、一切じゃなくて、ほとんど撮れないという感じですね。それから希望をして入所の人たちと一緒に食事をしたと言ったら、それはかなえられまして一緒に食事をしました。ま、こういう言い方は非常に失礼なんですけど、正直言って食事をしているような気分にはならなくて、非常に悲惨な現場を見た思いです。それから女性も男性も小さいというか、幼いあれも何人かいるんですが、そういう障害とは無関係なところで、人間の体は発達していくという。そういったものも男女ともに見まして、それも衝撃的な思いをしました。それは白石さんも細かに話しておりましたし、出生率に関しても何パーセントの割合で、こういう障害者が生まれるということは五大さんも話していましたが。そういうことを思いながら、やはり壁が立ちただかかっていて。しかしある雑誌から頼まれた記事ですので、なんとか苦労してまとめたことを、この番組を見て思い起こしました。それで、すごくよくまとめて、取材の積み重ねというものが、ずいぶん、よく行間という言葉を使いますが、テレビの場合は画面の要所要所に一生懸命取材したなとい

うことが表れているような気がしました。ただいくつかちょっと首をひねさせられるようなところもありました。栄区の施設の様子ですね。これはこちらの方にウエイトがかかっています、やまゆり園のことがちょっと後半うっすらとしちゃったような気がしました。それと先ほどのVTRでは出ませんでした、奈良崎真弓さんのことに触れていましたが、この方も障害を持っている方ですが、そのことも含めて、ちょっとやまゆり園の方の焦点がぼけたような気がしました。いずれにしても先ほど話したように、いろんな制約がある中でよくぞここまでまとめたなという思いがいたしました。本当に皆さんがおっしゃっているように、問題というか、最近もいろいろけがをさせたとか殺したとか、こういう施設の問題が大きな社会問題になっていますので、これからいろいろなケースが出てくると思っていますので、やはり丹念にこういった取材を続けていってほしいなという気がいたしました。以上です、あと皆さん他に言い足りなかったことがありましたら。今日は時間がオーバーしていますが、いろいろ質問、それから反論したいこと等あるかと思っておりますので、遠藤さんの方からお答えいただければと思います。

遠藤報道部長

「継続」と、嶋田が申し上げて。1年たつての番組ですが、事件が起こってからできる限りのところで継続取材をしてきた結果ということなんですが、尾野さん以外の家族は、きれいごとじゃない部分がやはりご家族の中にもあって、なぜ匿名にしなくてはいけなかったのかというところを突き詰めて出したかったなというのが一つあるんですが、そこはなかなか制約というか、追い切れなかった部分はあるかなと思います。これも、ここで終わりではないので、いろいろなアプローチを続けていきながら、取り組んでいきたいという。やはりこの取材の中で、施設のあり方とか、障害者福祉のあり方がいろんな切り口で課題が出てきていますので、その辺も問題提起しながらご紹介をしながら、この

やまゆり園の事件をきっかけに、いろんな現場取材してお伝えしていければいいなと思っています。

山田委員長 後はよろしいですか。先ほど吉川さんの方から、施設名を具体的に聞くのはどうか、という意見もありましたが、それに関しては。

遠藤報道部長 やはり直接ショックを受けた方に聞くというのは、一見配慮が足りないと感じる方もいらっしゃるかなというふうに、委員からお聞きして、そこはひとつ考える部分ですが。伝わらなければしょうがないんですが、あの場にいた聞いた人間は10日後からずっと取材をして、ご本人にもずっとお話を聞いている中で取材だったということ。そして一つのテーマとしてご本人の意思確認というのが問題意識としてありましたので、やはり一方の意見としては、尾野さんは違いますけど、重度の方でコミュニケーションができない方に、「どこに住む？」と言ってもそれは「決められないよ」という意見もあったんですが、なので「本人に意思確認してもしょうがない」というような風潮も一部ではあって。でも我々の取材の中では、いろいろな意思の伝え方があるし。鈴木幸子さんのところで言ったように強く手を握るとか、目の方向であるとか表情であるとか、一緒にいる方や専門家の人に言わせれば、できないだろうという方でも、意思をくみ取ることができる。そのことによって、自分の生き方とか、生活の場を決定していくというのが一つの問題にありましたので。そこで尾野さんにも「じゃあ、どこに住みたいのか」というところを。結果的にはいろんな場所を、芹が谷、七沢とかいうような落ち着かない状況にあるということも含めてお伝えしたというのが意図ではありました。その伝え方、聞き方は一考すべきところはるかもしれませんが、意図としてはそういうことがあったということです。

山田委員長 それで先ほど布施さんの方からも、東京裁判という非常に重いテーマのような感じで提案されましたが、それについても、この延長線上で何か新しい番

組ということも考えることと思いますので、期待しています。

白石委員

災害とか事故で、すぐ実名で出ますが、今回匿名はどこで決めるものなんですか。これはtvkだけじゃなくて、新聞記者も全部。

嶋田報道局長

今回はこういう事件ですので、警察の方から「こういう事件がありました。被害者はこうで」とか、あとは逮捕されたりしたら「被疑者がこういう人間で」ということは、基本は。様々な今特に被害者の背景とか、事情がありながらも、原則は捜査機関などで隠さずにその事情や背景を伝えてもらったうえで、報道機関が自主的な判断。ということは、権限があるわけではなくて、そこに各報道機関、メディアが責任を負いながらどういう形で伝えるのかということを考えるというのが、伝える側の原則ではあります。ただ、今現実様々、警察でいうとそれぞれの警察本部で取り扱いについては、若干差があります。ただこういう殺人事件の場合は重大事件、しかも今回はこれだけたくさんの方が被害者に全く落ち度がないにも拘らず、命を奪われたというケースであれば、やはり本来は警察が実名で発表する、それについて報道機関が隠さなければならない事情があれば、それぞれの責任で、それぞれの判断でお伝えするのが原則ですが、今回は異例中の異例で、警察の方が言うなればAさんBさん、Cさんという記号を19人並べた形で。当然被害者の方、亡くなられた方は、各社が取材でどんどん実名は把握していくんですが、さらにその先には、警察も匿名での発表の理由としては、家族の非常に強い匿名希望というのがあります。これについては当然警察で言えば、記者クラブという各社の集まりの中や、各社の中で悩み、本来は警察が判断するものじゃなくて、報道機関が判断するものだということがあったんですが、今回は取材すればするほど、事件の当事者と向き合えば向き合うほど、非常に難しいデリケートな問題だということ。そして先ほど委員の方からもありましたが、本来は被害者ご本

人が希望するならともかく、ご本人の希望ではなく家族の方の希望だということも、じゃあ、我々はどういうふうに判断すればいいのか。そして家族の方がきれいごとではなくどういう形で被害者の方と生活をして向き合ってきたのか、地域の方や親せきの方からどういうふうな目で見られていたのか。その背景には今回の番組タイトルにもありましたが、やはり見えない壁、我々報道機関もちゃんと向き合っただけでこなかったものがあるんじゃないかということにも、我々は行きついたというところで。各社は本当に悩んで未だに正確な答えは出ていないですが、匿名に現状に至っているのはそのような流れ、背景がありました。

山田委員長 ありがとうございます。他にございませんか。ないようでしたら、だいぶ定刻を過ぎていきますので、3番目その他報告事項にいきたいと思います。視聴者対応についてお願いします。

近藤編成部長 それでは視聴者対応についてお手元の「視聴者対応について」に件数がございます。7月15日から9月15日、8月は休会でしたので、2か月分です。電子メールは 11,993通、電話は1,407件でした。お問合せ内容の抜粋はお時間のある時にご覧いただければと思いますので、よろしくお願いします。視聴者対応については以上です。

山田委員長 ありがとうございます。視聴者対応について事務局から説明がありましたが、これについてご意見ご質問等がありますか。よろしいですか。ないようでしたら、前回の番組審議会の議事報告に入りたいと思います。

近藤編成部長 では377回7月の放送番組審議会の報告になります。

#### 議 事 報 告

山田委員長 本日は視聴合評で非常に重いテーマだけに、いろいろやりとりもさせていただきましたが、他に何か言い忘れたこと、言っておきたいことがございました

ら。

林委員

では、私から一つ。今日の「BPO報告」にも出ていますが、沖縄基地反対運動の特集を放送したMXテレビジョンの「ニュース女子」という番組に対するBPO審議がまだ出ていませんけれども、いろいろお話をお伺いしますと、tvkさんでレギュラー放送するというふう聞いています。審議未了のうちにいろいろお話しなさるのは難しいかもしれませんが、その経緯と、この番組に対するtvkさんの見方をお話いただければ。今日は時間が押していますので、BPOの審議が出てからでも構いませんけれども。弊社でも沖縄問題はずっと取材報道してまして、審議委員としてこれをレギュラー放送されることに対する局側の受け止め方、見方を知っておく必要があるなど。委員としてもそうですし、神奈川新聞の社員としても必要ではないかという考えがありまして、する次第です。今日は時間がありませんので、改めてお話をいただければ有り難いなと思っています。

山田委員長

そういうことでよろしいですか。

中村社長

はい。

山田委員長

では林さん、そういうことで、次回の番組審議会の際にコメントをいただくということで。他にございませんか。五大さん、何かないですか。何か言いたそうな顔をしていたから。ないようでしたら、これにて閉会いたします。

近藤編成部長

次回の視聴合評番組に関しては、また追ってご連絡させていただきます。